

令和2年度 第1回 長野県総合教育会議

日 時：令和2年9月14日（月）

10時00分～11時43分

場 所：県庁3階特別会議室

1 開 会

（伊藤企画振興部長）

それでは、時間になりましたので、ただいまから、今年度第1回の長野県総合教育会議を開会いたします。

本日の進行を務めます、企画振興部長の伊藤です。よろしくお願いいたします。

初めに阿部知事からあいさつをお願いします。

2 あいさつ

（阿部知事）

皆さん、改めまして、おはようございます。本日は大変お忙しい中、総合教育会議にお集まりいただきまして、大変ありがとうございます。特に鈴木寛先生には、web会議でご出席いただきまして、大変ありがとうございます。

本日のテーマ、「高校改革～夢に挑戦する学び～再編・整備計画について」ということであります。これまで高校改革については、地域でご議論をいただきながら進めているところでもあります。今、新型コロナウイルスの関係で、社会的には閉塞感が非常に強い状況でありますけれども、この新型コロナウイルスとの闘いを切り抜けた後は、新しい社会像を目掛けて、いろいろな取組を進めていかなければいけないと思っております。

学びの県づくりを標榜している本県としては、ぜひ高校改革を通じて、新しい社会像を打ち出していきたいと思っておりますし、また長野県の未来を担う子どもたちが、新しい高校の場で、意欲をしっかりと持ちながらそれぞれの能力・個性を伸ばしていつてもらえる環境をつくっていかねばいけないと考えています。

全国知事会においては、私が文教環境常任委員長を務めているということもあり、「これからの高等学校教育のあり方研究会」を、今月、設置をいたしました。鈴木先生に座長を引き受けていただいているわけでもありますけれども、その中でも修得主義の推進、そしてオンライン教育の活用、さらには、学校長がリーダーシップを発揮できる環境整備、こうした多様な高校のあり方について検討を始めたところでもあります。

本日は、鈴木先生から、日本全体の高校教育のこれからの姿についてのご意見もお伺いをしながら、本県における高校の再編・整備計画のあり方、そして今後の新しい高校の中

で新たな学びをどう実現していくかと、こうした点について意見交換をしていきたいと思
います。

皆様方の積極的なご意見を心から期待をして、私からの冒頭のあいさつといたします。
よろしくお願いいたします。

(伊藤企画振興部長)

続いて原山教育長、あいさつをお願いします。

(原山教育長)

教育委員会からも一言、ごあいさつを申し上げたいと思います。

本県の高校改革でありますけれども、学びの質でありますとか、仕組みを転換する新た
な学びの推進と、そして少子化になっても多様な学びを創造する再編・整備計画を、改革
の両輪に据えまして、一体的に取り組んでいるところであります。

再編に関しましては、2018年に策定しました「高校改革実施方針」に基づきまして、旧
12通学区ごとに地域の協議会を設置して、地域の皆さんの協力のもとに、丁寧に検討を進
めてきているところであります。

この間、施設整備につきましても、国内有数の専門家の皆さんに委員になっていただき
まして検討を重ね、過日、最終報告もいただいたところであります。

本日の総合教育会議には、鈴木先生にもご参加いただきまして共通認識を深め、これか
らの学びを実現する新たな高校づくりをさらに加速させていきたいというふうに思ってお
りますので、どうぞよろしくお願いいたします。

(伊藤企画振興部長)

会議事項に入ります前に、私の右側ですけれども、9月1日付で、こども・若者担当部
長が就任しましたのでご紹介いたします。

(野中こども・若者担当部長)

9月1日付で、こども・若者担当部長になりました野中と申します。次世代を担う子ど
も・若者の将来、未来を全力で応援していきたいと思っておりますので、どうぞよろしく
お願いいたします。

3 会議事項

「高校改革～夢に挑戦する学び～再編・整備計画について」

(1) これまでの経緯と今後のスケジュールについて

(伊藤企画振興部長)

それでは、会議事項に入ります。本日のテーマは「高校改革～夢に挑戦する学び～再編・整備計画について」であります。次第に沿って順に進めてまいります。まずこれまでの経緯と再編・整備計画の今後のスケジュールについて、駒瀬高校再編推進室長に説明をお願いいたします。

(駒瀬高校再編推進室長)

それではよろしくお願いいたします。まずはこれまでの経緯と今後のスケジュールについて、ご説明申し上げます。現在取り組んでおります高校改革は、2013年、平成25年度より局内検討を始め、長野県産業教育審議会の答申、長野県高等学校将来像検討委員会の審議をまとめまして、2017年、平成29年3月に「学びの改革基本構想」を策定・公表し、2018年、平成30年9月には「基本構想」をより具体化した、新たな学びの推進と再編・整備計画を両輪とする「高校改革～夢に挑戦する学び～実施方針」を策定・公表したところでございます。

また、この間、県民アンケートの実施や、関係者・関係団体との懇談、さらにはパブリックコメントの実施や地域懇談会などの開催を通して、県民の皆様方からも貴重なご意見を多数いただきながら進めてまいりました。

そして、現在、「実施方針」に基づき、旧12通学区ごとに設置しました「高校の将来像を考える地域の協議会」において、将来を見据えた高校の学びのあり方や、高校配置などについて活発なご議論をさせていただいております。

今年の1月までに、旧第1通学区岳北地域、第6通学区佐久地域、第8通学区上伊那地域、第9通学区南信州地域の協議会では議論が終了し、県教育委員会へ「意見・要望」の提出がございました。提出いただいた「意見・要望」を踏まえ、今年の3月に「高校改革～夢に挑戦する学び～再編・整備計画」【一次】(案)を策定・公表し、6月から7月にかけて、当該地区で、複数回、住民説明会を開催し、説明と周知を図ってきたところでございます。

当初は、2021年、令和3年3月に全県の再編・整備計画(案)を策定・公表する予定でございましたが、新型コロナウイルス感染症拡大の影響を受け、各地区で計画していた協議会の開催が相次いで延期となりました。そのため、協議会での議論を深めていただく時間を確保する必要があると判断し、全県の再編・整備計画(案)の策定・公表時期を2022年、令和4年3月に変更いたしました。なお、今年中に協議を終了し、県教育委員会へ「意見・要望」の提出があった地区の再編・整備計画に関しましては、【二次】(案)として、2021年、令和3年3月に策定・公表をいたします。

「高校改革～夢に挑戦する学び～」の完了目標は、2030年、令和12年3月ということにつきましては、現時点では変更はございません。

6月から7月にかけて、当該4地区で開催しました再編・整備計画【一次】(案)の住民説明会において出された主な意見などお話ししましては、「これからの子どもたちと地域のためになる再編であってほしい」、「新たな学びはスピード感をもって推進してほしい」、「中山間地存立高の存続の願いや、少人数で余裕をもって学べるようにしてほしい」など、高校改革、あるいは統合新校に対する期待とご要望として受け止めております。

住民説明会でのご意見・ご要望や、本日の会議での議論を踏まえ、教育委員会定例会でご審議をいただき、再編・整備計画【一次】を確定してまいりたいと思っております。以上です。

(2) 高校改革について (有識者等による講演)

(伊藤企画振興部長役)

次に長野県が目指す「新しい時代の新しい学びの推進」について、内堀高校改革推進役より講演をお願いいたします。

(内堀高校改革推進役)

お願いいたします。内堀繁利です。私からは、新しい時代の新しい学びの推進ということで、お話をさせていただきたいと思っております。本日はこのような4つの項目で話をさせていただきます。

まず、我々はどんな時代や社会を生活しているのか、ということですが、私たちは日常的に、例えば新型コロナウイルスの急激な世界的拡大とか、海水温の上昇で過去最大級の雨や台風が来る可能性だとか、子どもたちの減少、それ以上の高齢者の増加といったことだとか、機械化が進んでいく中で、飲食店などでロボットが使われたり、無人のコンビニがスタートしているというようなこと、あるいは玄関のドアすらスマホで開閉できたり完全自動走行車や「空飛ぶクルマ」も実用化がされそうとか、これまで治らない、治るのが難しいとされていた病気が、iPS細胞で治る可能性が出てきたというようなことについて話しています。これらは、グローバル化の進展とか一国では解決できない問題の増加、少子化・超高齢化とか、機械化の進展による雇用の減少や雇用形態の変化、超スマート社会と言われるような社会の到来、新技術の発達、医療の超高度化や人生100年時代というような今の時代や社会の状況を示しています。

さらには、VUCAの時代というような表現で今の時代を表す方もいらっしゃる、予想困難な時代とか、正解が一つでない時代という言い方をする人、あるいは誰も経験したことのない社会が到来しているというふうにおっしゃる方もいます。このような、次々と予想外のことが起き、変化が激しい状況の中で、我々は、これはどうもこれまでと同じことをやっていたのでは、うまくいかないだろうという思いに駆られるわけです。

こういう時代において何が大事なのか、ということですが、変化が激しく予想困

難な時代にあって、去年やあるいは昨日と同じことを続けていたのではうまくいかないだろうと。これまで常識とされてきたことを疑ったり、新しい発想で新しい価値を創ったり、競い合う方の競争ばかりを進めるのではなくて、共に創る方の共創競を進めたり、大人が期待する姿を子どもたちに求めるのではなくて、子どもたちが自らの意志で多様で自律した人として育ち、その人たちがそれぞれの得意分野を持ち寄って協働し合う社会、多くの情報や知識をインプットして、それをできるだけ早く正確に吐き出すというようなことに努力をするよりは、そういうコンピューターの方が得意なことはコンピューターに任せて、人間しかできないこと、AIやコンピューターを使うことも含めてですけれども、それを追求し磨く努力が必要だろうと。時代や社会に適応する力も大事ですけれども、それ以上にこれからは、新しい価値や新しい社会を創造する力が必要になってくるだろうと。

パソコンの父といわれたアラン・ケイは、未来を予測する最善の方法は、それを創り出すことであるというふうに言っています。予想困難な状況の中で不安を感じるのではなくて、我々が自分で未来を創り出してしまおうと。そうすればそれが我々の未来になるんだということでもあります。

教育課程の第一人者といってもいいと思いますけれども、上智大学の奈須先生はこのようにおっしゃっています。多分にSF的ではあるけれどもと断った上でですけれども、ここで先生がおっしゃりたかったことは、今ある教育システムが、我々はもう当たり前だと、ずっと続いてきたものだというふうに思い込んでいるかもしれないけれども、これは人類の歴史の中ではある一定の期間のものであって、形が変わっていく可能性が高いし、必要ならば変えていくことが大事だということだと思います。

我々は、文科省的に言えば、一人一人が豊かで幸福な人生を送り、よりよい社会の創り手となること、OECD的に言えば、個人と社会のWell-beingの達成ということを最上位の目標に置きながら、そのために必要な力を育み、そして、この世の中をよりよいものに変えていくんだ、豊かで幸福な人生を送るんだという意味を子どもたちが持てるようにすること。それから全体主義からブレイクダウンして個々に落とすという形ではなくて、一人一人を大事にして、一人一人の存在やいのち、そこから立ち上がってくることを大事にすることが、これからは一層大事だというふうに考えています。

その育てたい力、必要とされる力というのは、文部科学省ではこの3つの柱ということ言っています。OECDの学び方の羅針盤では、この3つの力を挙げています。長野県の実施方針でも、実際より少し文章を短くして表記してありますけれども、この3つを挙げています。これらはそれぞれ別のことを言っているということではなくて、違う視点から同じ方向性の違うことを言っているんだというふうに考えていただければと思います。こういった必要な資質・能力を育んでいきたいというふうに考えています。

新しい学びとは何なのか、ということですが、新しい学びとは、まずは新しい時代に必要な資質・能力を育むための「探究的な学び」、すなわち主体的・対話的で深い学びとか、アクティブラーニングというくくりになるとと思いますが、それを進めること。

加えて、一人一人に合った「個別最適な学び」、いろいろな年齢のいろいろな人との「協働的な学び」、生徒の実感とひもづけがされていて、かつ現実社会と一体となった「リアルな学び」、感動や発見にあふれた「ワクワクする学び」、こういった学びを新しい学びとして展開していきたいと。もちろん、これが今はないということではないんですけども、こういったものをどこの学校でも、どの瞬間でも入れるようにしていけたらなというふうに考えているところです。

それを具体的に模式図化しますとこのような形になろうかと思います。自律的・協働的な個別最適な学びで、EdTechも有効活用しながら知識・技能を習得し、応用・活用として探究活動、探究的な学び、プロジェクト型の学びを行っていく。そしてその中で思考力や判断力・表現力等を養い、学習意欲を向上させ、そして同時にリアルな学びやワクワクする学びを展開し、また個別最適な学びにつなげていくという考え方です。

ただ、実際の学びは、このようなシンプルな形で起きるのではなくて、例えば個別最適な学びを行っているときも探究的な学びは行われますし、探究活動を行っているときにも基礎・基本である知識・技能の習得はなされます。実際の学びは、もっと往還的、循環的、並行的、複合的ではありますが、いずれにしてもこういう学びを学校で展開していくことによって、探究の手法を身につけたアクティブラーナー、生涯にわたって学び続ける人を育成していきたい、そういうふうに思っています。

こういう改革によって、学校がこんな場所になればいいなという姿を示しております。生徒主体の学びが行われる場所。市民としての学びやアクションを伴った学びが行われる場所。一人一人が尊重される場所。失敗することは決してまずいことではないんだ、チャレンジすることが大事なんだと推奨される場所。全ての生徒に同じものが提供されるというよりは、一人一人に合ったものが提供される場所。自分を開示しても嫌な思いをしない、対話によって学びを深められる、楽しくて行きたい場所。それから自分はこういうことに興味がある、こういうことが大事だと思うという自分軸に基づいて、自分の成長を実感できるような指標によって生徒が認められる場所、これを現在新しい学びの指標ということで提示しているところです。

コロナ禍の中で、学校ってどんな意味があるんだろうということが、今、問われています。その中で、新しい時代において学校や教育にはどんな意味があるんだろうとか、どういう価値があるんだろうということを追求していった先の姿として捉えていただければというふうに思います。

では具体です。長野県の「～夢に挑戦する学び～実施方針」というのは6本の柱からできています。学びに関するものが3本と、再編・統合も含めた新たな学校づくりに関するものが3本であります。これを一体的に推進していくと。つまり新たな学びを実現するための新たな学校づくりであり、学校づくりを通して新たな学びを推進していくという、そういう形になっています。

新たな学びへの転換としては、先ほど触れましたけれども、探究的な学びへ転換し推進

していく。各学校が特色化・魅力化を進めるための3つの方針を策定し運用していく。高校入試制度を変えていく。

それから教育長の話の中にもありましたけれども、「学習空間デザイン検討委員会」など、学習環境の整備に力を入れていく。ICT環境も整備していく。

右側に行きまして、総合技術高校とか総合学科といった新しいタイプの学校や、多部制・単位制を充実拡大していく。通信制を改革していく。県独自のモデル校を指定して、実践研究をしていく。ICTを積極活用していく。高校間連携や高大連携を進めていく。例えば高校間連携について言えば、オンラインで他校の授業を受講できるシステムを構築し単位認定をしていくとか、AP（Advanced Placement）と言われるような、高校生が大学の講義を受けて入学後にその単位を認定していくなんでいうことを、現在検討しているところです。

さらに具体的なことを申し上げますと、例えばICT関係の整備・充実について言えば、県教委で5年間にわたって、今年度がその最終年度ですけれども、全普通教室に電子黒板と教材提示装置を入れ、それから40台のタブレットを入れてあります。したがって、この右にある写真のような授業が展開されることが可能となっています。

さらに、コロナ禍への対応として、1人1アカウントが取得可能な環境を県教委として整えてあり、かなりの学校で既にアカウントを取得しています。

今後の計画としては、GIGAスクールサポーターを間もなく派遣できるようになりますし、希望する家庭に端末とモバイルルーターを貸出しできる準備が完了しました。さらには、全普通教室にWi-Fi環境の整備、それから生徒3人に1台程度の端末を、本年度中に整備する計画です。

具体的な例として、望月サテライトについても触れたいと思います。これまでの通信制というのは、教科書を自分で学び、週1回程度通学し、紙ベースの課題を提出し、試験を受けて単位認定をするという仕組みであります。それを、望月サテライトは、まずはEdTechを活用するなどして個別最適化を図り、希望する生徒には毎日登校も可能にし、通信制が弱いと言われていたような、人とのつながりとか探究活動を、現在、約40の個人・団体に登録していただいている地域連携協力隊などとともに進めていきたいと思っています。

学習空間としては、地域連携協働室、憩いの場所となるオアシスルーム、自分たちの考えとかアイデアを形にしていくクリエイティブラボを設置しました。この部屋には、3Dプリンターとか撮影可能なドローン、あるいは編集可能なソフトを入れたパソコンなどを整備してありまして、子どもたちが実感を持てる学びを進めていきます。これまで通信制は自由度の大きさということが一番大きなメリットというふうに考えられてきましたけれども、同時に学びのサポートも充実していきたいということでこのような形を考えたところです。

それから県独自のモデル校としては、ここに書かれているような特色ある学び、これからの時代に必要であろうと思われる学びを、実践的に研究する指定校を6校設けて既に活

動が始まっています。そこに加えて、文部科学省関連ではSSHに3校、地域協働によるモデル高が3校、それから今年度から、スーパーグローバルハイスクールの指定を受けていた上田高校を拠点として11校が参加するワールドワイドラーニングという、イノベーションでグローバルな高校生を育てていくという事業の指定を受け、取組を推進しています。経済産業省とも連携し、本年度から「未来の教室」モデル自治体として長野県が指定され、昨年度からモデル校として指定されている坂城高校に加えて、軽井沢高校も本年度から参加し、すでに取組を進めています。

これまで各学校に入学した生徒は、基本的には自分の学校の中のカリキュラムを履修する形がほぼほぼ全部でありました。こういった形の中で、これからの新しい学びのあり方の一つとして、自分の学校を越えて長野県の高中生であれば、誰でも主体的に参加できる仕組みとして、プラットフォームというものを数年前から少しずつ構築してきました。

県の校長会と一緒に、生徒の主体性を育む夏合宿を2016年に初めて行い、翌年には県議会の議員の皆さんと意見交換を始め、現在も続けています。2018年には高大連携プラットフォームを構築、同じ年度に海外留学支援のための信州つばきプロジェクトを始め、昨年度は探究的な活動の発表の場である、高校生マイプロジェクトアワード長野県大会を始めています。

それから今年度からは、先ほど言ったワールドワイドラーニングコンソーシアム、これはおよそ6万人の生徒に対して1つの拠点ということなので、ちょうど長野県全体を範囲としたコンソーシアムということになりますが、その構築を開始します。SDGs探究プラットフォームというものを、知事部局やSDGs推進企業と連携して各地区につくっていきます。それから、過日、三者で包括連携協定を結んだ県立大・KDDIと一緒に、仮称ですけれども、高校生起業家クラブというような、自分のアイデアを形にしたり、実際に起業したりというようなものをつくっていく予定です。

学習空間については、これまでは、こういうハーモニカ型で一つの機能に一つの場所が対応する、しかもそれは、勉強というものに対応した形をメインとしたのが学校でありました。8月に検討委員会から提出された最終報告書では、これからの校舎というのは、学習空間だけではなく、生活空間であり、執務空間であり、さらに言えば、共創空間であるというコンセプトのもとに、右上のところですね、これからの時代、予測困難な時代に、どんな状況が生じて、例えばコロナ禍のようなことが起きても、対応できる柔軟な空間を創出していきたいというふうに考えております。このような形ですね。これについては、この後高校再編推進室から少し詳しく触れます。

最後です。これからの時代に必要な新しい学びと、その新しい学びに適した新しい学習空間を一体的に推進する中で、これからの時代に必要な資質を育み、生涯にわたって学び続ける、探究の手法を身につけたアクティブラーナーを育成することで、最上位の目的である、個人と社会のWell-beingを達成していくということが大事だと考えています。そ

の際、教育行政や学校の役割は、こういったことのための環境と多様な選択肢を整備することだと考えております。以上で終わります。ご清聴ありがとうございました。

(伊藤企画振興部長)

ありがとうございました。

次に東京大学・慶應義塾大学教授の鈴木寛様から、「我が国の高校教育のこれからの姿について」、ご講演をいただくとともに、ただいまの内堀推進役のプレゼンに対するコメントを併せて頂戴できればと思います。それでは、鈴木様、よろしくお願いいたします。

(鈴木 寛氏)

鈴木でございます。今日は、貴重な機会にお招きをいただきましてありがとうございました。

私、個人的には、本当に片思いかもしれませんが、長野県民だというふうに思っております。実は鈴木研究室の合宿所は長く八ヶ岳にございまして、ここで20年以上、多くの若者を輩出してまいりました。あるいは軽井沢のアイザック (ISAK) とか、そのアドバイザーをやっています。この前も軽井沢に行つてまいりましたし、それから何よりも、私も文部科学副大臣のときから阿部知事には大変ご指導をいただきまして、これまでいろいろな教育政策を進めてまいりました。

今、内堀先生からお話があったことですが、ほとんど私の考えていることと同じというか、逆に内堀先生と私とは、内堀先生が上田高校にいらっしゃるときから、ある程度、上田高校を新しい教育改革の、特に高大接続改革のモデルとして、私の東大や慶應の学生も何度も派遣させていただいたり、あるいは上田高校の生徒さんを私どものキャンパスにお招きして、私からも何度も、授業や、いろいろなワークショップをさせていただいて、ずっとご一緒につくってきたというか、新しい実践をお手伝いさせていただきました。

そこで見たり聞いたり、あるいは感じたり、議論したりしたことを、文部科学省の大臣補佐官として、新しい学習指導要領や高大接続改革に取り入れていったとこういうことでありますので、したがって、内堀先生のプレゼンテーションの3分の2ぐらいは、ほとんど、私の頭の中と同じだというふうに考えていただければと思います。

とりわけ文部科学省の教育方針、それから私は、今、OECDの教育スキル局のアドバイザー、そしてOECDが実施します「Education 2030 プロジェクト」の理事をしております。1期・2期を通じて理事をしているのは私だけということでもありますし、それから私の盟友でありますアンドレアス・シュライヒャーが、今、OECDスキル局の局長をやっておりますので、先ほどOECDの議論は、まさに、この日本と、そして長野県とOECDと、ご一緒につくってきたプランだと言っても過言ではないというふうに思います。

ただ、教育の世界では、このwrittenカリキュラム、書かれたカリキュラムと、taughtカリキュラム、教えられたカリキュラムと、そしてacquire、生徒が実際に獲得したカリキュ

ラムと、この3つのことを常に注意せよということがよく言われるわけですが、これは教育政策も同じであります。プランをする、要するに書かれたプランは、そこを書くのも大変ですけど、それよりも何よりも、それをどうやってインプリメントというか、要するにそれが実行されたプランになっていくのか。そしてその実行されたプランが、まさにその地域や、あるいは高校や、高校生、その彼らを変えていく。彼らを豊かに、Well-beingも達成する、そういうプランになっていくかどうかということが、いよいよ、まさに仏つucking魂が入るか入らないかというところが肝なわけであります。

私は、要するにwrittenのところ、もちろん個別にはいろいろな若者とずっと向き合っていてまいりましたけれども、まさにそのwrittenされたものを、これから本当に実践されていく、そして具体的に一人一人の若者をつくっていくと、そういう大変大事なステージ、あるいは大事なその役割を、これから長野県さんに担っていただくんだなど。また、そのことは、文部科学省もそうですし、OECDも、あるいは本当に世界中が長野県の実践を大変注目していると、こういうことだというふうに思っております。

それで、先ほど、私が申し上げたいことはかなりご紹介があったわけですが、改めて皆様方に、強調といいますか、確認をさせていただきたい話といたしまして、こういう改革というのは本当に大変だと思います。どうしてもいろいろな関係者が多いし、どうしても関係者は、現状というもの、あるいはこれまでの現状というものに非常に捉われがちでありますけれども。まず1点目、皆様方に強調させていただきたいのは、これは、私が補佐官のときに文部科学省の若者に常に言い続けてきたことではありますが、これから再編をしていく高校で学ぶ、あるいはその高校で学ぶことを目指す中学生や小学生というのは、本当に2100年まで生きるんですよ。今の小学校の子どもたち、特に女子児童の平均寿命が107才になるというふうに言われておりますので、そうしますと彼らはもう軽く2100年を超えていくわけであります。

現在の高校生でも、その多くは2100年まで生きていくわけで。つまり、我々がやはり意識しなければいけないのは、22世紀まで実際に生きて、そして22世紀を本当につくる、そういった若者、高校生たちの基礎、基本、ベース、土台、こういうものをつくっているんだと、そのためのプラットフォームをつくっているんだと。そういう意味で、内堀先生が、冒頭、新しい時代ということは何度も何度も強調されましたけれども、教育は国家百年の計という言い方はしますが、これがたとえ話ではなくて、実際の話として、本当に100年先を見据えた、発想と判断、決断というものが求められるということは、ぜひ皆様方に改めて強調させていただきたいと思っております。

加えまして、そのVUCAの時代、これも我々がOECDからつくっていったキーワードなわけですが、私は、まさにフランス革命、イギリス産業革命、アメリカ独立革命以来ですね、人類の歴史が、200年ぶり、あるいは300年ぶりに大きく変わっていく、そういう局面にこれから入ってくると思っております。これからの高校生、あるいは中学生・小学生、若者たちは、まさに200年ぶり、300年ぶりの世界の歴史の、人類の歴史の大転換期

の真ただ中を生き抜いて、そしてさらには、今回のその人類史というのは、200年前、250年前はイギリスやフランス、あるいはこのアメリカがつくった歴史を、日本がその後から後追いをしていく、これがまさに明治維新だったわけですが、今回は日本もその先頭に立ってほかの国々と一緒に新しい人類史をつくっていくと、まさにエポックメーカーを輩出していくというのが我々のミッションであると。

しかもそれは東京から生まれるわけではありません。東京というのは、ある意味では近代の象徴のようなところで、東京をつくる、あるいは東京から人をつくるというのが明治維新だったわけですが、私のゼミでは卒近代、近代を卒業すると。近代に感謝とノスタルジーを持ちつつも、やはり卒業というのは、脱近代でなくて、卒近代と言っているんですけれども、敬意と感謝をもって、しかし卒業していくと、そういう意味で卒近代と言っています。まさに卒近代のエポックメーカーを、長野県がまさに世界史の先頭に立って、世界の先頭に立ってつくっていただく。私は、これはもう本当に、本当にその点を信じております。それを世界中の国々の、様々な関係者と一緒にネットワークし、コラボレーションしていくということだと思います。

そこで、私が次に申し上げたいことは、この言葉がはやってもはやらなくてもいいんですけど、AARという言葉です。これもOECDで出した概念ですが、これまではPDCAということが言われてまいりました。プランして、そしてドゥして、それをチェックして変更のアクションをする。日本はこれで大成功し、そして世界の品質を誇る工業立国、長野県もその中心であったわけで、最も難しい精密機械工業というのは、まさに長野県が輩出した世界に冠たる産業でありました。

しかしVUCAの時代になると、プランしても、このいろいろな外部環境が変わりますと、リプランしなくてはならない。そうすると、結局、この日本というのは、20年間、失われた20年ということを言われますけれども、プランして、状況が変わってリプランして、リプランして、またリプランして、リプランして、なかなかドゥに行かないと。その間に、大変大事なチャンスを逃してしまったり、すぐ対応しなければいけないリスクの対応が遅れたり、そういったことで、日本というのが、この失われた20年、失われた30年ということになってしまったのではないかと。

そこで、このAARというのは、1つ目はアンティシペーション (Anticipation) です。アンティシペーションというのは予想する、予測する、そして関係当事者が、まさにみんな準備して、いろいろな情報を持ち寄って議論して、そして次なる時代を見通す、予想する。しかしその予想は完璧ではありません。当然、時々刻々変わります。そういう中で、予想し、そしてもうできることからアクションをしていくと、これが次のAですね、アクション (Action) をしていく。そしてアクションをしても、当然、日々修正、改善をしなければいけないので、それを毎日のようにリフレクション (Reflection) して、振り返って、そしてそれをよりよいものに、常に改善していく。

これはプログラムづくりの現場では、デバッグ (debug) という言い方がありますが、と

にかくプログラムを書いてみて、回してみても、どこかにバグがあると止まる。デバッグというのは、バグを取るという作業、デバッグ主義とも言えますけれども。やっぱりこういうふうなAARだとか、デバッグだとか、そういったことにこの頭を切り替えていかなければいけない。恐らく日本社会が一番苦手なところがここだと思います。

特に教育というのはこの、まさに無謬性ということを大変大事にしますから、そのことは日本のとてもいい面だったわけでありまして、引き続きいい面ですけど、何でも過ぎたるは及ばざるがごとしで、この教育の世界に、誤謬と申しますか、誤りとか、そういったものを持ち込んではいけません。そういう、ある意味での潔癖主義と申しますか、そのクリーンルームをつくるような考え方で日本はやってきました。これまでは、それが功を奏して世界一の工業立国になって、20世紀はそれでよかったわけですが、我々は、20世紀の教育をもう一回リフレインするのか、それとも22世紀、ですから、今、我々の目の前にあるのは20世紀を選ぶのか、22世紀を選ぶのか、そういう大きな選択、そういった極めて大事なタイミングで、このプランがつくられているということでもあります。

子どもたちにAARを望む以上、大人たちがAARでないといけません。それに対して、やはり市民、県民、あるいは保護者、あるいはメディア、私はメディアの皆さんの協力というのが一番大事だと思います。メディアの皆さんというのは、もちろんいい意味で、これまでいろいろなチェックをしていただいて、それがいろいろな修正・改善につながったわけですが、これからはAAR的なメディアの応援ということも非常に重要だと。こここのところを、まさに総合教育会議の皆さんが、例えば保護者の方もいろいろなことを言ってこられると思います。地域の方もいろいろなことを言ってこられると思います。今後も、日本というのは、そのいいところと、それから改善点だと、改善点ばかり見つけて、だからいいものはつくれるんですけども。しかし、全てはバランスでありまして、そういったことがこれからどんどん出てくると思います。

特に長野県は、ある意味で、世界で最先端の考え方に基づく最先端のプランですから、ある意味では、そういういろいろな異論とか違和感というものが出てくると思います。また、出てこないようなものは、イノベティブでもクリエイティブでもないもので、私は、阿部知事という本当に素晴らしいリーダーシップを発揮したこのリーダーがいらっしゃる長野県でしか、私はこの改革はできないと思いますが、しかし、長野県の教育関係者は、そういったことに、特に責任あるポジションにある方は、ここをどう乗り越えていくか、ここをどう説得していくのか、熟慮していくのか。その我々のジェネレーションの後ろ姿を見て育った若者、高校生が、まさにAARを身につけ、この新しい、非連続なイノベーションができるエポックメーカーになっていけるんだというふうに私は思っております。

私は、まさにOECDの目的の中で触れられましたけれども、今回、特に強調して入れたのは、その板挟みとか、想定外と向き合って、そしてそれを乗り越えられるということが、この大事な教育だと思っております。これまでは決められたことを、正確に、丁寧に実現して、その精度をどんどんどんどん上げていくということが、日本は得意、まさに精

密機械のような、そういう人間、人材をつくってきたわけですけども。これからは、まさに人間の仕事というのは、いろいろな価値観の異なった人たちの間で、様々な対立、あるいは緊張、あるいはジレンマというものが生じてまいります。そういったジレンマとか、あるいは未知との遭遇をしたときに、慌てふためかない、要するにビビらない、そういう若者を育てなければいけないと。なぜ学問をやるかという、要するに未知なるものと遭遇したときに、これは何だろうかということ、観察を試みたり、あるいはいろいろな仮説を立ててみたり、あるいは実験を試みたり、分析を試みたり、その態度と、未知なるものと遭遇したときに、それをどのように、その真相を追求していくのか、まさにこれが探究なんです。

今回、なぜ探究をとっているかということ、これから毎日が未知との遭遇なんです。そのときに探究的な態度を身につけていて、何だかよく分からないXと向き合ったときに、でも高校の時代から、中学の時代から、このいろいろな未知なるものと向き合い続けてきた子どもたちはですね。今、日本人というのは、未知なるものと向き合うとおそれが先に立ってしまいます。あるいは不安が広がるんです。新型コロナ対策もそうです。要するに分らないものに向き合うと、もう本当に浮き足立ってしまう。もちろん、正しく不安になる、正しく心配するのはいいんですけども、しかし不安になってはいけないということですね。

そのときに、こうした探究的な学びをしていると、もちろん未知なるものと向き合ったときに、むしろそれを何だろうと探究することを、好奇心を持って、楽しむという言い過ぎかもしれませんが、そのことを楽しめる、その困難なプロセスをもきちっと受け止めて乗り越えていけると。そのときに、1人ではなかなかその困難は乗り越えられない、だからこそ仲間が必要なんだと。こういった成功体験を、中学校や高校のときにやっておくということが非常に重要だということで、OECDや文部科学省は、新しい教育化というのも提示させていただいているということでもあります。

それから、私は、これからの高校改革ということで非常に重要だと思っておりますが、シェアとコラボレーションです。シェアというのは共有する、それからコラボレーションというのは協働するということですが、これは内堀先生のプレゼンテーションの中に、高校連携というのがございました。要するに高校と高校が連携をすると。今まではいろいろな高校が切磋琢磨してコンペティション (competition) するわけですね、競争するという、競い合うということだったわけですが。これからは、様々な高校が、もう徹底的にこのそれぞれの資源を、この貴重な資源を共有して、そして持っているものを持ち寄って協働していくと、こういうことが大事なんです。だからプラットフォームなんです。そのシェアとコラボレーションのためのプラットフォーム、これをつくろうというのが今回のプランであります。

したがって、これからぜひイメージしていただきたいのは、1人の高校生が15才の、高1の春に入学して、3年間、同じ高校にずっと通い続けて卒業していくというのが、むし

ろ少数派になっていく、そういう時代だと思います。複数の高校をまさに渡り歩く、そういう高校生も出てくると思いますし、あるいは同時に複数の高校からの教育プログラムを履修するといったようなことも出てくる。そういうことになると、例えば3つの高校が連携して一つの授業をつくっていくとか、その連携の仕方も、私は高校魅力化プログラムというものの理事・評議員などしていますけれども、組み方がすごく多様になる。要するに地域の山村の高校が3つ4つ集まって、あるいは10個ぐらい集まって何かのプログラムをつくる場合もあるし、長野県の高校の中で組む場合もあるし、場合によると長野県の高校と、ある別の県の島の高校が組む場合もあるし、それから長野県の高校と東京の高校が組む場合もあるし、長野県の高校と外国の高校が組む場合もあるし、そういう、まさに様々な、多様な、これからのキーワードの中に、公正な個別最適化というのは、これ、林芳正大臣のときに私が座長代理を務めて、Society5.0時代の学びと人材育成のあり方と、こういうプログラムを出しました。そのときのキーワードが公正な個別最適化ですが、個別最適化を単独校でやろうとすると、あるいは単独県でやろうとすると、相当な負担になります。要するに、その多様性に合わせたこのプログラムをどんどんどんどん、メニューを増やしていかなければいけない。そのときに、この公正な個別最適をやりながら、しかし資源をどれだけ有効に活用するかということになると、まさにこのシェアとコラボレーション、いろいろな人たちと組むことによって多様性を増すことができる。多様な教育を提供することができる。そのために、まさにハードとソフトとヒューマンの学習環境も整備が必要だと、こういうことであります。

今日は、特にハードやソフトについて、特にICTについてのご説明はございましたし、これについては、プランはよくできていると思いますから、あとはどれだけ県民の皆さんの支持をいただいて、このプランをより加速をするかということが大事になってくると思います。

次に大事になってくるのは、ヒューマン、人的資源、教員。しかし教員だけではありません。今、チーム学校ということが言われていますけれども、学校も、教員も、あるいは職員だけじゃなくて、スクールカウンセラーとか、あるいは部活のいろいろな外部指導員とか、様々な人たちによって学校というのが構成されています。

それから特にこれから探究ということになってきますと、プロジェクト・ベースド・ラーニングという、プロジェクトに基づく学びということが非常に重要になってきますが、これには地域の方々の協力が不可欠です。かつ、この探究、特に高校では理数探究と総合探究という授業が入ってまいりますけれども、ここは、都市と地方が逆転するものすごいチャンスになってきます。つまり、地域には様々な問題が、ある意味で本当に至るところに存在している。もう学校の門を一步出れば、様々な社会課題がそこにはあるわけですね。これ、なかなか東京だとそうはいきません。要するに課題というのが非常に見えづらい。それからまだそうしたことが顕在化してない。しかし、地方では、そのことが顕在化しているわけでありまして。

そうなったときに、まず生徒にとって課題というものを、明確な課題意識というものを持つことができるということ。次に、探究、あるいは課題学習をやろうとすると、地元の農協だとか、あるいは地元の企業だとか、あるいは地元の病院だとか、地元の介護施設だとか、そういう方の協力、あるいは地元の行政とか、地域の人とか、これはまさに地方の強みですね。

ただ、今までは、地方だとなかなか専門的な探究教育のできる大学の教授や、あるいは大学のサポートというのが得づらかったわけですが。そのデメリットは、今回のオンライン学習によって、長野市や、あるいは東京の高等教育の関係者、あるいはそこで学ぶ、自らが探究教育で育ってきた若い大学生が、オンラインを通じれば、全く地域のこのハンデなく、高校生と毎日のように触れ合うことができると。こういうようなことで、メリットはそもそもあったんだけど、デメリットが一举に解消しつつあると。こういう好機をぜひ生かしていただきたいなというふうに思っております。

まだいろいろと申し上げたいことはございますけれども、本当に私は長野県のプランに大変期待をしておりますし、ぜひ世界に先駆けた、世界が注目するような、お手本にするような、ベストプラクティスをつくっていただきたいというふうに思いますし、私も微力でございますが、この皆様方と新しい教育の歴史をつくることをご一緒させていただきたいと思いますので、どうぞよろしく願いいたします。以上、私からのお話とさせていただきます。ご清聴、誠にありがとうございました。

(伊藤企画振興部長)

ありがとうございました。大変、示唆に富んだご講演、ありがとうございました。

(3) 各地地区の再編・整備計画及び新校の目指す姿、統合新校開校に向けた今後の進め方について

(伊藤企画振興部長)

それでは、最後に再編・整備計画【一次】(案)について、3つの新校の目指す姿や新しい学習空間のイメージなどを含めまして、駒瀬高校再編推進室長から説明を簡潔にお願いいたします。

(駒瀬高校再編推進室長)

よろしく申し上げます。ただいま新たな学びの推進というようなことに絡んでのお話でしたが、これからは地区の再編・整備計画と新校の目指す姿ということでご説明いたします。今回、【一次】(案)を策定した地区は、スライドでお示ししてある4地区でございます。まず地区全体の状況を、その後、新たに再編統合を検討している新校3校の目指す姿についてご説明します。

まずは、旧第1通学区の再編・整備計画としましては、今後、高校配置については、「当面の間、現在の高校の配置を維持する」として、今後の検討が必要な計画として、「将来的に学校規模の縮小や再編基準への該当などにより2校の存続が困難となった場合は、下高井農林高校を飯山高校の地域キャンパスとする」ということを方針としました。

現在、飯山高校においては「探究を深める学び」、下高井農林高校は「専門性を深める学び」が行われておりますが、地域での生徒の主体的な活動や学びを支援する組織づくりは必要不可欠だと考えております。岳北地域におきましては、学校と地域との連携・協働による学びの実現に向けて、新たな検討組織が設置され、議論が継続しているところでございます。

続きまして旧第6通学区、佐久地域の再編・整備計画についてご説明いたします。佐久地域は、先端的な医療機関など、豊かな地域資源を最大限活用した時代の最先端や、地域の「ホンモノ」に触れる学びを、新時代の学びのモデルとして推進してまいりたいと思います。また、このような学びを通して、地域の活力を生み出し、持続可能なまちづくりの核となっていくことも期待されます。

今後の旧第6通学区の高校配置については、青でお示ししたのが今回の検討に基づく新たな高校です。既に本年4月、佐久市望月に自分の生活・学習スタイルで学ぶことができる通信制、長野西高校望月サテライト校を設置いたしました。今後は、小諸高校と小諸商業高校の再編統合による小諸新校、野沢北高校と野沢南高校の再編統合による佐久新校の設置を計画しております。また、赤でお示ししたのは都市部存立校、緑でお示ししたのは中山間地存立校です。多様な学びの場を配置し、生徒一人一人が自らの夢に挑戦する学びの実現を目指してまいります。

続きまして旧第8通学区、上伊那地域の再編・整備計画についてご説明いたします。豊かな自然環境や、農・工・商、バランスよく発達した産業界など、地域資源に恵まれている上伊那地域では、全県に先駆けて地域の協議会を設置していただき、地域の高校の将来像についてご議論いただきました。

今後の旧第8通学区の高校配置につきましては、青でお示ししましたのが、今回の計画に基づく伊那北高校と伊那弥生ヶ丘高校の再編統合による伊那新校のほか、多様な学びが可能でキャリア教育などが充実した、南信地区に未設置の総合学科高校、上伊那地域の産業を学び地域を支える人材育成を目指す、専門学科の学びを集約した総合技術高校の設置を検討しております。また、緑でお示ししたのは中山間地存立校、黄色でお示ししたのが多部制・単位制高校です。

続きまして旧第9通学区、南信州の再編・整備計画をご説明いたします。リニア新時代を見据えた学びの場の構築や、産業界とのさらなる連携、地域の文化や歴史を大切にして、地域全体の学びのネットワークの構築を目指してまいります。

今後の旧第9通学区の高校配置としましては、青でお示しをしたのが、今回の計画に基づく多部制・単位制の機能を補完する飯田OIDE長姫高校の定時制、赤でお示ししたの

が都市部存立校、緑でお示ししたのが中山間地存立校です。リニア新時代を迎える中、以上のような多様な学びの場を当面は維持し、各校の特色を生かした学びを推進するとともに、今後の少子化の状況を見据えながら、中長期的な視点で、これからもこの地域の高校配置の将来像を検討していく必要があると考えております。

それでは3つの新校、小諸新校、佐久新校、伊那新校の目指す姿について、簡単にご説明いたします。

まず小諸新校は、普通科・商業科・音楽科の学びを継承し、地域と連携して探究学習を進め、地域資源を最大限活用した、地域や日本のイノベーションを創出する力を育む学びの場を構築し、地域活性化の拠点となる新校の将来像が考えられます。小諸新校は、学科の枠を越え、学科横断型の学びを可能にするカリキュラムの編成を基本とし、多様な価値観に触れ、協働する力、地域の未来を創造するための力を育む新たな学びの場であります。

続いて佐久新校についてご説明いたします。佐久新高は、普通科教育の推進の場として、佐久エリア内外のトップランナー、先進的な医療機関・大学・企業・研究機関などと連携し、それぞれの分野の最先端に触れる、新たな社会や地域の創造につながる探究的な学びを通じ、地域や世界の未来を牽引するリーダーを育成する学びの場を構想しております。

最後に伊那新校でございます。伊那新校は、上伊那地域の持続可能な普通科教育の拠点校として、SDGsの学びを通じ、地域や世界の課題や解決策を学ぶ未来志向の学校を目指しております。生徒の個々の可能性を最大限に引き出し、卓越性の伸張をさせる分野最先端の学びや、地域や世界の社会課題を探究する学びによる多様性の理解、さらに地域の歴史・文化を学ぶ「伊那谷学」や、産・官・学による「郷土愛プロジェクト」などとの連携による郷土愛の醸成を通じ、地域や世界で主体的に活躍できる卓越した力を育む学びの場の構築を考えているところでございます。

今、ご説明いたしました新校の目指す姿を具現化し、これからの時代にふさわしい学びの場を整備するために、8月に提示された「県立学校学習空間デザイン検討委員会」の最終報告をもとに、「新たな学び」と「新たな学習空間」を融合した一体的な教育改革を進めていきます。従来の画一的な教室や校舎のつくりを見直し、これからの学びに必要な4つの空間、「学習」「生活」「執務」「共創」を創出することで多様な学びを展開します。

また、これからの学校は、地域とどのように共生していくのが大切な視点になります。従来の学校内での完結した学びではなく、これからは地域と連携する学びができるよう、地域連携協働室による地域との共創空間を創出していきます。

教育委員会だけでなく、知事部局の政策も新しい学校づくりに取り入れることで、新しい時代の教育県長野、持続可能な地域社会の実現を目指してまいります。

最後に、統合新校開校に向けた今後の進め方について簡単にご説明いたします。【一次】(案)が確定した後、統合新校ごとに「新校再編実施計画懇話会」、仮称でございますが、教育委員会が主催して開催いたします。この会は、再編対象校の学校関係者に加え、地域の代表として自治体関係者、産業界の代表、同窓会、PTA、生徒の代表にも加わってい

いただき、意見交換を行い、検討を進める会です。

検討事項としましては、まず県議会の同意に必要な、再編統合対象校、募集開始年度、活用する校地・校舎、設置課程・学科及び想定する募集学級数、統合新校の学びのイメージに係る意見交換を行っていただき、それを踏まえ、県教育委員会で「再編実施基本計画」を策定し県議会の同意を求めてまいります。

議会同意後は、開校に向けて具体的な検討をさらに進めるための意見交換を継続してまいります。なお、開校準備の進捗状況につきましては、適時適切に県民の皆様へに広報するよう努めてまいりたいと思っております。説明は以上でございます。

(4) 意見交換

(伊藤企画振興部長)

ありがとうございました。ここからは、鈴木様、内堀推進役を交え、意見交換の時間とさせていただきます。ここまでの説明及びお二人のご講演を踏まえまして、再編・整備計画【一次】(案)の内容について、また統合後の新校での新たな学び・新たな学校づくりをどのように実現・充実させていくかといった点について、ご議論いただければと思います。

それでは、順次、お願いいたします。伏木代理者、お願いします。

(伏木教育長職務代理者)

それでは、私のほうから、お話ししたいことはたくさんあるんですけども、3点に絞ってお話しします。内堀先生と鈴木先生から大変ありがたいお話をいただき、勇気づけられました。ありがとうございました。

まず1つ目なんですけど、高等学校の再編・整備計画に関わる地域ごとの説明会において、まとめていただいている資料からは、全貌は分からないわけですけども、目を通す限りでは、あるいは私が関係者からお話を伺う限りでは、自分の経験に基づく旧来の高校教育の延長で、高校再編をイメージされる方がまだ多いなという印象があります。

私自身、毎年担当している中央研修とか、免許更新講習では、大変多くの現場の先生方が受講されているわけですけども、私の講義の中で20年後の学校の話を持ち出すと、皆さん大変びっくりされるんですね。でも今回の新しい学習指導要領は、中教審の、特に教育課程特別部会が、20年後の学校を想定して策定したものです。つまり、この高校再編計画に関しても、これから子どもたちを送り出そうとする中学校の先生方や、変わろうとする高校の先生方にどれだけ浸透しているのかという、このあたり少し心配かなと常々思っております。もしここが不十分だとすれば、この理想的な、とても勇気をいただけるような、今回のこの学びの改革の流れを、単に少子化、財政の論理で高校の統廃合を進めるのかと受け止められかねない、そんなふう思うわけです。

そこで1番目の質問ですけど、これまでの住民説明会の経緯の中で、県が進めようとする

る学びの改革のイメージが、ある程度、伝わったとお考えなのかどうか。これまで丁寧に進めてこられたことは理解しておりますけれども、その感覚といいますか、その感触あたりを少し確認させていただきたいなと思います。よろしくをお願いします。

(伊藤企画振興部長)

今のご質問について、どなたが答えていただけますか。

(駒瀬高校再編推進室長)

ではお答えさせていただきます。住民説明会ですけれども、4地区で計16回行いました。700数名の方々に来ていただきました。私どもとしましては、先ほどご指摘のように少子化ということではなく、これからの社会が大きく変わっていく中での高校改革の必要性ということについては、しっかりと説明させていただきました。多くの方々はその点は理解いただいているかと思っておりますけれども、しかし、やはり母校がなくなるとか、地域の高校が変わっていくということに対しての不安といいますか、寂しい気持ちというか、そういうものについては、何人かの方からご発言がありました。全体としましては、この新しい高校改革、新たな学びの推進と再編・整備計画については、ご了解をいただいているんじゃないかと思っています。

(伏木教育長職務代理者)

ありがとうございます。

(原山教育長)

先ほど内堀推進役、それから鈴木先生がおっしゃっていただいたような、相当長期的な先の未来に向けてどう改革していくかということについて、住民の皆さんにどれだけ浸透しているかというのは、まだこれからだと思っています。そういう意味では、これからもやっていかなくてはいけない課題かと思っています。今日の総合教育会議の中でこういう議論をしていくことも含めて、さらにそういった形で、そういったものを住民の皆さんに浸透していくような取組はしていきたいというふうに思っております。

(伏木教育長職務代理者)

ご説明、ありがとうございます。では加えてご質問をさせていただきますけど、今日の話の中で内堀先生の提案資料の中で、校舎及び学習空間の改革が出てきます。大変魅力的で、こういうものを説明会等でも説明されているんだと思うんですが。これが単に絵に描いた餅では、どうしても、みんなが一緒にやろうというふうにならない。そこでやっぱり、これはお金がかかるものだと思うので、知事がおられるので、我々教育委員としては、この高校の学びの改革の方向は大変すばらしいと思っております、これにはやはり

この空間のイメージをセットにして、具体的な住民との対話というものが広げられると、逆にそうでないと、理念だけを語られても進まないのではないかと思うんです。そのあたり、質問というか、お願いになりますけれども、知事のお考えをいただければと思います。お願いします。

(阿部知事)

学習空間の検討委員会の皆さんの議論は、私も最終報告の場に立ち会って聞かせてもらって、どんどん実現していかなければいけないと思っています。ただ、お金の話は、私は財政上の責任を持っている立場なので、教育委員の皆さんに逆にお願いしておきたいのは、やはり、例えばある程度設計も標準化するとか、やっぱりコスト管理をしっかり考えてもらいたいということであったり、あるいは、日本の行政というのはあまり費用負担に無頓着で、取りあえずつくるという中で直線的に税金を投入する話しか考えてないんですけども、例えば、今回、地域連携の話もあります。それから、今回、新しい学校をつくれば、やっぱり地域の中で、単に子どもたちのためだけの施設ではなくなってくるのではないかと思いますので、そうしたことも含めて、まずコストの最適化、それから費用負担の分担のあり方、あるいは建築手法でも、今後、コストの部分、負担のあり方を変えられる部分もあると思いますので、そうしたことも含めてしっかり考えていかないと、高校だけよくなったけど、財政の持続可能性が失われるということがないようにしなければいけないと思っています。

もう1点、ちょっと逆に私からも言っておきたいのは、例えばICTの話だとか、校舎の話だとか、それぞれ単体で見ると非常にいい構想だと思っていますし、私はどんどん進めるべきだというふうに思っています。ただ、それが現実の子どもたちへの教育、あるいはその子どもたちの学びとどう結びつけていくのかという、その中身の話が抜きに箱の話だけが進んでしまうと、いわゆる箱物行政の視点に引っ張られてしまいます。私は、こういう施設は必要だと思っていますけれども、こういう施設がなくても人がいれば、一定の教育は本来できるものではないかなというふうに思いますので、そうした、学びの中身の実質化ということは、こうした新しいICT化だとか、学びの空間だとかつくと、どうしてもそっちに目が奪われがちですけども、それだけではない、本当の実質的な中身のところについて、教育委員会としてしっかり方向づけをしてもらいたいなと思っています。

(伏木教育長職務代理者)

ありがとうございます。今の知事のお話を受けて、最後、もう一つだけ。事務局からいただいている資料の15ページの中に出てくる写真に、私はちょっと違和感を感じたんですね。従来の一斉・画一授業の教室の中に3人で1つの端末を持つという。やがて来る時代という話なのかもしれませんが。やはり私たちは、学びのイメージを変えていく必要があるのではないかと。これ、予算的に3人に1台は、きっかけとして必要だとは思うんで

すけれども、1人1台という方向になると、学びそのものが変わってくる。家庭学習と授業との連関の仕組みが変わっていく、子どもたちのキャリアのつくり方が変わってくると思うんです。そうすると私たちが今まで当たり前だと思っていた、その授業の形が大きく変わらざるを得ない。そういう観点から、先ほどの学校の学びの空間、それは、もしかしたら社会施設なんかと連動することが望ましいのかもしれない、そういうふう考えるんですね。

そうすると、BYODですね、自分の端末を学校でも使えるようにすると。毎回毎回、行政が1人1台を買うのかという、それはちょっと、そういう時代ではないだろうとも思うんです。ところが、個人端末を公共の学校の中で使うには、それなりのルール、セキュリティの対策が必要だし、まだまだこれからの話だと思うんですけれども。そういうふうに日常の空間と地域のもので学校とがもう少し連動していく、そういう発想、私たちが柔軟に考えていく時代になっているんだろうと思います。

その観点で、これから高校再編になったときに、学校施設が一部、空くというか、その問題が出てくると思うんです。今、ワーケーションというような、テレワーク時代に新たな空間が登場し始めています。これを教育委員会が、管轄をするというよりも、むしろ三セクとか民間との連携とかで、その高校再編によって空いた公共スペースを、ワーケーションとか、新たな観光とかと何かつながるような、そういうものにしていきたい。放課後の若者の居場所だとか、地域のいろいろな人たちが学び合うような、そういうイメージのものにつくり替えていく。そういうものとセットであれば、この高校再編の話が、母校がなくなるからとか、今までどおりのイメージを崩されるみたいな声が、むしろ未来に向けて一緒に協働して考えていきましょう、つくっていきましょう、知恵を一緒に絞りましょうというふうに誘導していけるのではないかとこのように思っています。

そこで質問は、このBYODという、その個人端末を学校で使うというような、コロナだからじゃなくて、今後の学びとしてそういう可能性についてどうなのかということと、空いた公共スペース、再編によって使われなくなる校舎が、新たな使い道として可能なかどうかというところを教えてください。以上です。

(伊藤企画振興部長)

ただいまのところですが、お願いします。

(原山教育長)

BYOD、1人1台端末をどういうふうに整備するかという観点で、BYODなのか、それとも公共で整備するのかというのは、観点として出てくると思っていますので、それは、今、別途、検討している最中であります。

そしてもう一個は、例えば統合したときに空いた施設であるとか、あるいは少子化によって空いてくる施設、それらを単に学校の施設というふうに考えるだけではなくて、ワー

ケーションみたいなこととか、あるいは地域の連携のための施設だとかということが必要かというふうに思っていますが。これは、本当に知事部局と連携しながら、地域をどうやって振興していくかという観点で考えていく必要があると思いますので、そこは知事部局と連携しながら、ぜひ考えていければというふうに思っております。

地域連携室みたいなものに、例えばワーケーションの人たちに入ってもらって、そこでいろいろな学びをするというのもあるでしょうし、また統合後も、空いた施設に対しての使い方というの、当然、出てくるんだろうというふうに思っています。いずれにしても、そういったことについても検討していきますし、今後、知事ともよく話をさせていただきたいと思います。

(伏木教育長職務代理者)

よろしくお願いします。

(伊藤企画振興部長)

ご意見がある委員の方、矢島委員、お願いいたします。

(矢島委員)

私からは、感想を2点、お伝えしたいと思います。長野県の教育委員会は、議論を深めるために計画を1年延期したということなんですけれども、実際に世の中がこれだけ急速に変化してしまっていて、そして子どもたちは成長していくわけなんです。ですから、この延期した1年が、子どもたちにとって不利益を被ることなく、どのような状況であっても私は歩みを止めないでいただきたい、スピード感を持って進めていきたいというのが、1点、あります。

それからもう一つは、内堀さんの資料の18のところにあるように、長野県の高校生たちが、今、急激にやっているのではなくて、2016年からのことが載っていますけれども、着実に新しい学びに取り組んできたというこの実績があって、その着実な積み重ねの中で、今、このように議論ができるような環境になってきたと思います。ですから、ちょっとした環境を整えて、そうすると子どもたちがこのように主体的に動いて、子どもたちの本来持っている力が本当に発揮できるようになっているかなというふうに思いました。

ですから、このようなこれからの時代の中で、例えば新しい時代ってどういうものなんだろうというような、正しい知識というものを私たち大人が提供して、子どもの力を信じて、そして失敗を失敗で終わらせないように、選択肢をたくさん出していけるような、そして力を発揮できるようにしていきたいと思います。

そのためには、お二方のお話にあったとおり、私たち、その大人に問われているかなというふうに思いますので、ぜひ、子どもの力を信じて発揮できて、そして世界から注目される長野県の子どもたちに何ができるかということ、これからも議論していきたいなど

いうふうに思います。以上です。

(伊藤企画振興部長)

ありがとうございました。鈴木様は11時25分で退席されるご予定ですので、もし何かありましたら、一言、頂戴できればと思いますけど、よろしくをお願いします。

(鈴木 寛氏)

どうもありがとうございます。もう、委員の皆様方のお話はごもっともだというふうに思いますので、あとは、もう一つ一つ乗り越えて、また、そのプロセス自体が、地域連携、ソーシャルキャピタルなんていう言い方もしますけれども、ソーシャルキャピタルを豊かにしていくことにもつながると思いますので、ぜひ、何かこのいろいろな課題、難問を、全て学びに変えていく、あるいは地域を強くする、そういうきっかけに変えていく。

私は、危機という言葉、危険と機会、オポチュニティー (opportunity)、チャンス、この両方あるんだという、まさにピンチをチャンスにみたいなことも言われますけれども、やっぱりそういう力をですね、ぜひ地域並びに我々が、次のジェネレーションに示していくという観点も大事ではないかなというふうに思いますので、ぜひ成功を期待しております。どうもありがとうございました。

(阿部知事)

どうもありがとうございました。

(伊藤企画振興部長)

それでは、続けたいと思います。ほかにご意見のある方、中澤委員、お願いします。

(中澤委員)

お願いします。特に生徒たちが通いたくなるような面白い学校って、本当にどうやったらつくれるんだろうとずっとこう考えていて。やっぱり再編で、今までとさほど変わらないような学校だったら、やっぱり地元の皆さんに伝えていくことはできないだろうなと思っていて、変わる、意識変更というのは、今までの高校のイメージ、取り払わないと、面白い学校には繋がらないんじゃないかなと思っていたところに、今、鈴木先生のお話を伺って、あるちょっとイメージができてきて、ちょっとワクワクしてきたということが一つ。

それから、2つ目が、予想する、予測するという話が出ていたんですけども、本当に幼児教育をずっとやってきていて、与えられたものだけやっていたら、これ、幼児でも予測するとか、予想するとか、そのあたりは本当に難しいということはずっと感じてきていて。内堀さんの資料の10のところにある、新しい時代に必要な力を育むための学びというところは、本当にそれはもう幼児期も全く一緒に、ふだんの生活、こんな感じで大事

に考えているんですけど。ぜひ、一つは、この高校改革と同時に、やっぱり幼児期からのつながりの中で、ぜひこの学びを、幼児教育、小学校、中学校などの学びの改革に、ぜひつなげてほしいなということが一つ。

それから、地域らしいユニークな学校をつくっていくには、やっぱり地元の方たちの支援が本当に必要なんだろうなと感じていて。幼稚園の場合ですと、公設民営というのが、普通に、今、行われるようになってきて、1人でいろいろ、県立、市町村営とか、何かそんなことって可能なんだろうとか、もっとかゆいところに手が届くような、何かそんな感じのことが実際できるためには、また地域と一体でしていこうって、それは大事なのではないかと思って、何かそういうこう、きっといろいろ縛り、難しいんでしょうけど、イメージとして、県立市町村営みたいな、何かそんな感じのつながりってできないのかなと思っていました。

ただ、鈴木先生の話聞いていて、やっぱり、多様性に合わせたプログラムって、1つのところだけでは難しく、例えば3つの高校が1つのカリキュラムみたいなことをおっしゃっていて、やはりいろいろな人たちと組むことで多様性のことができるという、ここは一つのすごい大事な観点かなというのを感じました。以上です。

(伊藤企画振興部長)

ありがとうございます。ほかはよろしいでしょうか。

(荻原委員)

感想だけです。明日のニュース、新聞、まずは太字で、再編・整備計画が明らかに、こんな感じだという、1番からという。ただ実際は、何ていうかな、ちょっと私も、今日、お話を聞いていて、何かやっぱり、先ほど伏木先生もおっしゃっていました、将来の教育改革と高校再編・整備計画が、何かこう分断されているような感じがどうも否めないなという感じは正直しています。

やはり何かもう少し、先ほど鈴木先生がおっしゃったような、10年、15年先じゃなくて、それこそ本当に2100年ですか、そういった日本の姿、世界の姿を見据えて、今、こういうふうに変えなければいけない、こうしていきたい。今の子どもたちが、将来、学ぶ環境を、今、つくろうとしているいう、やっぱりそういう議論がある中で、もう避けては通れない再編・整備計画という、何かこう、そこが分断されているような感じで、何か行ってしまっているなという、ちょっとそんな印象を持ちました。実際はそうではないと思うんですけども。そうするとやっぱり、教育現場にいる方々は不安でしょうし、では、今後どう、何をどう支援すればいいのか、あるいは私たちのその職場環境がどうなるのかという、そういう心配もありますし、実際、私も、教育関係者、そういう機関からの手紙もいただいているわけなんですけれども。

もう少しやっぱり、私たちは、その将来に向かって大きなビジョンを持って、それこそ

100年後、200年後の日本の姿、そのためのスタートとして、今のこの教育改革なんだということ、もっとメッセージとして打ち出せばいいなと思ったのと、教育委員会が、私たちが決めたものを、承認してもらい、同意を得るということではなくて、それこそ、もちろん議会の方々いらっしゃいますけれども、それこそ県民に、あるいはメディアに、私たち教育委員会はこう考えているけど、かえってどうですかと。私は長野県内のメディア、とてもインテリジェンスがあるメディアがたくさんあると思いますので、そういうところも、みんなで協力して、未来のその教育の姿というのを、何かみんなで作っていく雰囲気、しっかり醸成されれば、まずはその高校の再編・整備計画というのももちろん、そのパーツの一つとして入ってくるとは思いますけど。これはちょっと何か別に語られているような感じがするのは、ちょっと残念だなというふうに。

よりもっと、今日の内堀先生のお話や鈴木先生のお話、それと私たち教育委員会が考えていることが、県民挙げるような議論になって、それこそ、もう長野の教育は、ゼロカーボン達成のために、それを目指してやるんだとか、あるいはもうSDGsを徹底的に取り組むために、もう長野の子どもたちはそこを集中的に勉強していくんだって、何かこう、やっぱりワクワクする未来という、そういうものがこう膨らむような議論になっていけばいいなというふうに感じました。感想です。ありがとうございました。

(伊藤企画振興部長)

今、割と根幹的な話をいただきました。

(原山教育長)

まさに、そういう方向性での議論をどんどん深めていきたいと思っています。そして、これまでのプロセスをやった中で、そういう統合新校に期待する皆さん、非常に大きい中で、そういったものを実現する高校として、話していかなければいけないと思いますし、長野県の高校全体がそういう方向に向かっているんだということ、ここではこれに対しこれがスタートラインについたというふうに思っていますので、そこからさらに進めていきたいというふうに思っています。

(伊藤企画振興部長)

よろしいでしょうか。塚田委員、お願いします。

(塚田委員)

私も、鈴木先生のお話、非常に興味深く伺いました。再編計画の根底にある背景を、少子化ですとか、そういう部分を求めずに、新しい学びとは何か、新しい時代とはどんな時代かということ、丁寧な説明していただくと、理解を深めるというふうに思いました。以上、感想であります。

(伊藤企画振興部長)

ありがとうございます。これまでのご意見を踏まえて、では内堀高校改革推進役、何かありますか。

(内堀高校改革推進役)

様々のご意見をいただきまして、ありがとうございます。1点だけちょっと、先ほど伏木職務代理者の、3人に1台の端末のお話ですけど、3人に1台というのは、これが最終目標ということではなくて、その先のことも視野に入れながら、1人1台を使うのなら3分の1くらいの授業が、2人に1台を使うのなら3分の2くらいの授業が同時に展開できるところまで今年度中に整備するという趣旨でして、そのようにご理解をいただきたいと思います。いずれにしても、そういったことも含めまして、これからの時代に必要な力を育むために、先ほども言いましたけれども、全ての学校のすべての活動で新しい学びが行われていくようにしていかなければいけないなど、改めて感じました。

1人も取り残さないということが、最近、よく言われますけれども、教育の議論の中では、ともすれば一つの基準を当てはめて相対的にできる子が優れているみたいなどころ、どうしても最終的にはそういうふうになっていってしまう傾向も依然としてあるので、本当の意味で1人の生徒も取り残さず、全ての生徒がワクワク感を持って、それぞれが持ついろいろな個性に応じた力を身につけて社会に出ていくと。それで、他の人と協働しながら、自分の幸せと、よりよい社会とを創る担い手になっていくということが理想だと思いますので、引き続き現実にそういうふうになるように、様々な皆さんと話をしながら進められたらなど、改めて思ったところです。

(伊藤企画振興部長)

ありがとうございました。教育長、何か。

(原山教育長)

もう、先ほどから申し上げているとおりです。

(伊藤企画振興部長)

それでは、時間ももう過ぎておりますけれども、この再編・整備計画【一次】(案)の大枠については、方向性、了解ということで、皆さんよろしいですかね。その上で、最後に知事から、一言、お願いしたいと思います。

(阿部知事)

いろいろ熱心なご意見を出していただきましてありがとうございます。まず、鈴木先生

がおっしゃっていただいたが、ゼロカーボンについて2050年までどうしようかと考えていたんですけれども。2100年の時代を生きる人間をどう育てるかということは、やっぱりもっと前面に出すべきではないかなと。どうも、4、5年のところの議論で止まっている気がするので、それだとどうしても、多くの人たちの思いが合わさっていかないなと思うので、高校改革、2100年を生きる子どもを育てるということをもうちょっと前面に出していてもいい。

もちろんいろいろな意見があると思いますけれども、これも鈴木先生おっしゃっていましたが、本当に子どもたちに恥じないようなプロセスを踏んで、議論をしっかりして、対立し合う意見を調整して進んでいくことが重要なのかなと思いますので、そういう意味で、荻原委員もおっしゃっていただきましたけれども、我々の案を議論するというよりは、2100年の子どもを育てるってどういうことだろうかということをもっと、もう一度、多くの皆さんと問題意識を共有して進む必要があるかなと思いました。

そういう中で、私としての意見と、委員の方から出ていた話について、コメントしたいと思います。私の意見、3つあるんですけれども、内堀先生にも発表していただいて、非常に、方向性は私も全くそのとおりでと思っています。ちょっと何点か工夫していただけるといいなと思っているところがあります。

一つは、さっきも言いましたが、教育の中身です。教育の中身が、学習指導要領からどこまで離れられるのかということももちろん追求した上で、長野県として、学びを保障するということが明確に出していく必要があるんじゃないかなと思います。

私として特に重要視してもらいたいと思っているのは、内堀先生の資料の中にも出ていますけれども、協働とか協力だと思うんですね。今までの暗記型は、これはもう完全に打破しなければいけないと思っていますけれども、それだけでなく、やっぱり自分の点数がよければいいという話では、個の世界でやっていて、やはり社会に出て1人で完結するということが、多分ほとんどなくて、例外的に一部あるかもしれないですけれども。ただ、そうはいつだって、例えば文筆業の人でも編集者の協力がなければいい作品をつくれなんでしょうし、アーティストも周りでサポートしている人たちとの関係性を抜きには、自分の発表とか発信というのはなかなか思うようにできないはずなので。そういうことを考えると、ありとあらゆるところで協力とか協働というのが重要で、あまり学校教育の中ではそういうことを注視してきていなかったのではないかなと。もちろん全然無視しているとは思わないですけれども。みんなで協力して実行していく、目的を達成していくということに、もっともっと軸足を置いてもいいんじゃないかなと思います。

それから2点目ですけれども、学校の話は、もちろん子ども中心に考えなければいけないと思っているんですけれども。やっぱりそこに携わる人々が、どんな人がいて、その人たちがどういう役割を果たさなければいけないのかということをも、いま一度、再構築する必要があるのではないかなというふうに思っています。

まず先生のあり方、これは、もう明らかに変わる。探究的な学びとか、ICTを通じた

教育とかですね。そういうことになってくると、先生のあり方は確実に変わるんだろうなと思います。それから保護者の人たちの協力とか、地域の皆さんのサポートとかについて、今は、学校の外部の人たちには、学校はとっつきにくいし、学校は閉じられているよね、もちろん学校によって違うんですけども、そういうふうに思っている方もいらっしゃると思います。もう開かれた学校をつくっていくということが大事ではありますが、それと同時に、やっぱり学校側からも、もっとこういうところは協力してほしいとか、こういうところは一緒にやりましょうということで、多くの人たちがもっともっと役割を果たせるような学校のあり方というのを考えていかないと、やっぱり学校の中で閉じた環境というのは、もうこれは、多分、20世紀型だろうなと私は思います。その外との関係、それからその関わる人のあり方、特に学校の先生のあり方は、私、21世紀型、22世紀型の教育に切り替えていくと、先生もシフトしてもらおうということが重要だと思います。だんだん高齢化社会になるので、一度、ビジネスとか、公務員とか、いろいろな産業で従事されたような方たちが、やっぱり高校教育に携われるような仕組みというの、つくっていかないといけないのではないかと思います。

それから3つ目として、この高校改革の方針をセットした後で、その改革を維持して持続可能な仕組みにしていく仕掛けが必要で、それと、例えばICTであれば、ICT教育推進センターみたいなものをしっかりつくってもらいたいと思うし、教育内容のあり方を含めて、高校改革のあり方をどう県民の皆様と共有して、そして持続可能な改革につなげていくかという、体制のあり方をよく考えてもらう必要があるのではないかと思います。

鈴木先生も言っていたように、作文するのは、多分、教育委員会の一部の職員が頑張ればできます。ここまでは多分できるんですね。本当に持続可能な仕組みにして、県民もしっかり腑に落ちて、自分たち一人一人の問題として受け止めて行動していくには、相当な工夫と努力が必要になってくると思います。そういう意味で、教育委員会事務局の組織であったり、あるいはこれをどうやって、地域で推進エンジンとなるような人たちのネットワークをつくって進めていくか、そういう体制整備、仕組みづくり、こうしたものも必要だと思っています。

あと、教育委員の皆さんから出ていた意見についてコメントすると、例えば、高校改革でやっていますけれども、やっぱり幼稚園・保育園や市町村、私学、こうした皆さんとも、大きな方向性は共有していくということが重要で、何か高校だけ変わったけど、ちょっと接続は悪いよねという話ではいけないなと思います。森のようちえんも小学校との接続が、結構、課題かなと思っていますけれども。そういう意味で、高校だけではなくて、そのほかの教育機関との連携も大事だし、問題意識の共有も必要だと思います。

それから学校同士のコラボレーションは、ぜひ、教育委員会でしっかり考えてもらいたいなと思います。地域内、県内、県外、海外、もうオンラインを使えば、どこでもつなげるので、そういうこともしっかり意識したいと思います。これもまさにさっきの体制と関係していて、ただ、一朝一夕に海外の高校とつながるというのは多分無理なので、そう

いうことができる体制をどうつくっていくかということが、多分、重要だというふうに思いますし、私はできるだけ学校現場が主導していろいろな取組を進めていく必要があると思います。県なり県教委は、基本的な方針を決めたら、あとは現場の先生たちが取り組むことをバックアップしていくとか、そういう体制にしていく必要があるのではないかと思います。

それから、中澤委員がおっしゃっていた学校のあり方、県立市町村営みたいな話も、私はいいと思いますし、公設民営、県立民営とか、もう少し柔軟な学校運営のあり方を考えていかないと、多分、公設公営型というのは、22世紀型にはなかなかなじまないような気もしているので、学校経営形態のあり方というもの、いま一度、視野に入れて、今後、考えていくようになるだろうと思います。

それから、あと、空いた学校の活用は、これはしっかりやっていったほうがいいと思っていますので、そこは教育委員会と一緒に考えさせていただきたいと思います。

あと、荻原委員がおっしゃっていただいたように、進め方とかプロセス自体を、学びの改革の重要な要素にしながら、これから進んでいくということが大事だと思いますので、できれば、私が出てくるのがあまりよくないような気もしているんですけど、私も県民と対話を、この学びを通じてさせていただくこともどんどん増やしていきたいなと思いますし、ぜひ、教育委員の皆さんも、ぜひ、教育委員会事務局と一緒に、この改革を先頭に立って牽引していただければありがたいと思います。

大きな方向性は、いろいろな皆さんのご協力でまとまってきましたので、ぜひ、将来をしっかりと、長期的な視点を見据えて、多くの皆さんと進める体制を構築しながらやっていきたいと思いますので、よろしく願いいたします。ありがとうございます。

4 閉 会

(伊藤企画振興部長)

本日の会議事項は全て終了です。これで閉会いたします。お疲れさまでした。